大杉の歴史散歩

大杉本町　久保新一

私の故郷は小松の市街地から二十数キロ東に入った山間部の大杉地区である。正しくは小松市大杉本町といい、一九五五年の小松市編入前は能美郡大杉谷村字大杉小字山崎である。この部落は国土地理院二万五千分の一地形図の動橋、尾小屋、山中、加賀丸山の交わるところである。私の生家は東経一三六度三〇分、北緯三六度一五分のほぼ接点にある。だから大杉の地形を知るには四枚の地形図が必要となる。

大杉の地名の由来は一七〇一年（元禄十四年）に書かれた「郷村名義抄」に「此村領に昔年大杉の木御座候に付村名に成候由申上候」とある。大杉神社の西方に杉の大木があったことから付けられたという。山崎の地名はさだかでないが、中世にこの地に築城したという山崎高五郎に関連があるのだろうか。

大杉地区は大杉上町（御保谷）大杉本町（山崎）大杉中町（中村）下大杉町（下村）の四つの部落からなる。一番早く開けたのが山崎で、その枝村として北東に御保谷が分かれ、西方に亀淵と鳴社という村ができたが、一六〇〇年前後に天災を受け共に山崎に合併されたという。私の先祖はその亀淵村に属していた。その後、中、下の二部落ができた。一番高い山は鈴が岳（一一七四・七メートル）で大白山の稜線に続く山である。そこから流れくる川は大杉谷川といい、梯川の源流である。大日山は大杉ではカブトと呼ぶ。

私がまだ小学生だった一九五四年（昭和二十九年）、山崎から数キロ奥地に入った林道工事の現場で古代の遺跡が発見された。村の先祖が住んでいた場所が見つかったというので、私も友だちと見に行き、道路わきの斜面を木の棒で突いて何か出てこないか探した憶えがある。間もなくきちんと発掘され、学校の来客室のガラス棚に土器の破片がいっぱい並んだ。子供たちのあいだで粘土で土器を作るのが一時はやり、私にはそれ以上何の関心もなく二十年が過ぎた。最近になって読んだ二、三の郷土史の本にこの遺跡のことが出てきたので、重要な遺跡だったんだなと驚き、それならあの頃、もう少し勉強しておけばよかったなどと思う。学校で詳しく説明を受けた憶えもないが、小学校の頃のことだから私が忘れてしまったのかも知れない。

山崎遺跡と名付けられたこの遺跡は今から三千五百年ほど昔、縄文中期の集落跡である。場所は大杉本町の通称バンド谷出作跡というところである。河岸段丘上にあり石組炉が現存している。出土した遺物は土器片、凹石、石錘、石鏃、石棒、磨製石斧、打製石斧などである。この春、ワラビを取りにいった際に車を止めて注意して見たら、土器片が露出していた。これだけならどうということはないが、この遺跡が大杉谷式の標準遺跡として知られるようになった。私は考古学に何の知識もないが、縄文中期の土器圏は、南加賀を中心とする葉脈状文土器圏と、能登半島の海岸地帯に見られる貝殻文土器圏と、これらの混在する土器圏の三土器圏に分れ、山崎遺跡は葉脈状土器の代表みたいなものになっているらしい。葉脈状というのは土器の表面の模様が木の葉の脈のようになっているということである。

大杉にはその他にも縄文中期のものとして小坂遺跡、大杉向遺跡、戸谷口遺跡、後期のものとしてマセ洞窟遺跡、古墳時代のものとして天井横穴古墳がある。私の生家のすぐ近くにこのように遺跡があることも、実は最近までまったく知らなかった。これらの遺跡は現在の大杉地区の住民たちと直接にはつながっていないにしても、狩猟を中心にした人々が、その昔この山深い地に生活をいとなんでいたということ自体が興味深いことである。

八二三年（弘仁十四年）加賀の国が越前から分離したとき、大杉は能美郡軽海郷に所属していたという。しかし村があったという以外は何もわからない。

鎌倉時代に入り白山信仰が盛んになるにつれ大杉もその支配下に入ったと考えられる。大杉にも泰澄伝説が残っているが、それによると、泰澄大師は越前国から白山へ登って修行をした後、加賀の地へ下山し、風嵐、牛首から大日山を越えて大杉村に下って、下村の大向に草庵を建てて住民を教化し、従者の浄水坊が大杉に安住し、その後天台宗の西浄寺を建立したという。一四一八年（応

永二十五年）には真言宗の光明寺が山崎の東に建てられたという言い伝えがあり、寺田とか寺谷とか寺向とかいう地名が今も残り、寺谷より五輪塔が、守屋谷より薬師石像が出ており、白山信仰の影響が裏付けられる。光明寺は兵火によって焼けたといわれている。

大杉には各部落ごとに神社がある。白山神社（下大杉町）足比売神社（大杉中町）大杉神社（大杉本町）八幡神社（大杉上町）の四つである。これらの神社の成立年代は全く不明である。足比売神社については、式外の国史見在社である垂比咩神社にあてはめる説もある。事実だとすれば平安時代にさかのぼることになるが裏付ける資料はなにもない。社宝に「かけ仏」がある。この足比売神社にはケヤキの大木、大杉神社にはイチョウの大木があり共に樹齢は五百年ぐらいと思われ、神社の成立もそれぐらい逆のぼるかも知れない。また大杉中町には高野聖の住んでいた高野坊の伝説がある。

下大杉町と大杉中町の中間にある円光寺が開かれたのは一四五九年（長禄三年）のことである。この寺を開いた蓮照応玄は円光院学本坊ともいい、京都本願寺第七世存如上人の二男である。「蓮如物語」（一五八〇年）には「遁世の身にまかりなり候上は山居仕るべしと仰ありて、本蓮寺案内にて大椙谷に入御あり」とある。京都の綾小路にいた人が綾氏として円光院の世話役となった。なぜ本願寺の血脈を引く人がこのような山村に来たのかわからないが、自分が本妻の子であるため本寺を相続するつもりでしたら、兄の蓮如が存如の後をついだことへの失意からだという話もある。東本願寺の信徒たちはこの円光院を「北の御本寺さま」と呼んだという。第五代賢祐の時、円光院は円光寺に改められて現在に至っている。一七七一年（明和八年）の小松寺庵騒動では監督の不充分を問われている。このようにゆいしょのある寺ではあるが、二回の大火にあい、資料や宝物はあまり残っていない。

山崎の草深良照は蓮照の弟子となって道場を開き、亀淵村の亀淵了意は三代賢了の下に道場を開いている。その後共同で山崎道場を開き、現在大杉本町に円光寺説教場として残っている。円光寺の岡下の聞慶寺は円光寺八代賢応の子浄信が一七六二年（宝暦十二年）に開いたものである。

一四七一年（文明三年）蓮照の兄蓮如が吉崎から布教に来ている。西天井に蓮如上人が杖で地をたたいたらわいたという泉がある。

はげっ谷の山頂に山崎高五郎を城主とする山崎城があったと伝えられている。一向一揆と関係があり、越前の朝倉と戦うためのひとつの拠点とも考えられる。大杉神社のイチョウの大木はかれが家臣の弓術の練習のためめに植えたともいわれている。大杉は当時能美郡南組に属していた。

一六〇〇年（慶長五年）から大杉も前田藩の領地になり、波佐谷の十村紋兵衛の支配下に入った。一六七〇年（寛文十年）の村御印は現存しないが、草高は一〇八六石、小物成には山役、炭役、漆役があった。文政年間からは山粟津組に編入された。

山崎の東北に大杉口関所跡がある。白山をめぐる越前と加賀の馬場の抗争に手をやいた幕府は、一六六八年（寛文八年）白山山麓十八カ村を両藩から取り上げて天領とし、飛騨郡代の支配下においたため、大杉は天領との境界となり口留所という関所がもうけられたもので、一八七一年（明治四年）まで二人の番人がいた。

私の子供の頃は、麻の栽培がさかんで、大きなカマドが村のはずれにあった。皮をむいたあとの白いアサギはつるつると滑り、わざと足をのせてひっくりかえったのがなつかしい。

いま村はひっそりと静まりかえっている。一八七八年（明治十一年）に戸数三七六軒、人口二、〇七六人だった村は、瀬谷と合併して大杉谷村となった一九〇七年（明治四十年）には戸数三六〇軒、人口一、九五五人に、小松市に編入した一九五五年（昭和三十年）には戸数二八〇軒、人口一、三二〇人に、一九六九年（昭和四十四年）には戸数一六九軒、人口七四七人と大幅に減少した。

一九七五年（昭和五十年）一月一日現在、大杉上町六軒一四人、大杉本町四〇軒一三三人、大杉中町二六軒一〇一人、下大杉町四八軒二二九人で合計一二〇軒（世帯）四七七人と明治の始めから約百年の間に村は四分の一になってしまったわけである。

廃屋ばかりが目につく村を歴史散歩する足取りは重いが、そういう私も村を去った一人である。